

第3回UIIまちづくりフォーラム 「これからの都市公園の経営と利活用」

本年6月に改正都市緑地法が施行され、民間事業者による公共還元型の収益施設の設置管理制度が創設されるなど、都市公園の利活用に関して官民連携が促進される制度が準備されることになりました。

これからは地域の特性やニーズに応じてどのように都市公園の利活用を考えていくのかということが課題になります。様々なステイクホルダーによる創意工夫や合意形成、持続可能な経営手法の構築と市民の意欲的な参画をいかに促していけるかといったポイントについて、講師からの話題提供とディスカッションを通じて考える機会を提供します。

【日時】 2017年10月30日(月)
18時30分～20時30分

【開催場所】 グランフロント大阪北館タワーB 10階
ナレッジキャピタルカンファレンスルーム(B01+02)

【主催】 公益財団法人都市活力研究所

【プログラム】 講演1「千里南公園パークカフェ整備事業」
吹田市土木部長 松本利久氏

ショートプレゼン「千里南公園におけるCafe' Au Cafe'の取り組み」

関西大学大学院理工学研究科修士課程1年 長峯佳代氏

関西大学大学院理工学研究科修士課程1年 中村穂希氏

講演2「健康都市づくりのための公園マネジメント」

株式会社公園マネジメント研究所 代表取締役 小野 隆氏

講演3「公園を育てるころみ」

アーバンピクニック(神戸三宮 東遊園地にぎわい創出事業)

事務局長 村上豪英氏

意見交換

【コーディネーター】 関西大学環境都市工学部 教授 岡 絵理子氏

講演1「千里南公園パークカフェ整備事業」 吹田市土木部長 松本利久氏

本日は、「パークカフェ」という事業を中心に、吹田市がどのようなことに取り組んでいるのか、また日頃どのようなことに悩んでいるのかを披露しながら、私自身、公園の潜在的な活用の仕方、能力、また何ができるのかというのを学んで帰りたいと思っています。

吹田市の人口は37万人少しです。面積は36.09km²ですから、1万人強が1km²に住んでおり、全市、市街化区域の都市です。市内全域の緑被率を算出しており、26.1%でかなり多いと評価しています。緑に関する市民の評価が非常に高く、最近のアンケートで吹田市に住み続けたい理由は、環境、緑、そういうことを挙げておられます。特徴的なところでは、世帯の7割程度が共同住宅、3割が戸建てで、集合

住宅にお住まいの方が多く、そういうところが公園及び空地、オープンスペース等に対しての潜在的なニーズかと思えます。これはベッドタウンということにもつながります。

豊中市と吹田市併せて、千里ニュータウンが昭和37年国策的に作られたのですが、吹田市は大阪市に接しており、神崎川を隔ててすぐ北に位置しています。近隣には豊中市、池田、箕面、茨木それから摂津市があり、北千里駅から阪急電車で20分ちょっとで梅田まで来られる、非常に利便のいいところです。名神高速道路吹田インターも本市にあり、中央環状線、または中国自動車道等の交通アクセスがあります。モノレールもあります。大阪空港にも近い利便性のある都市です。これが吹田市の地図ですが、1970年「EXPO70」で万博公園ができました。その万博公園をひとつのキーワードとして吹田市が印象付けられるのですが、千里ニュータウンの中に総合公園として千里北公園、千里南公園、それから名神高速道路で分断されている紫金山公園、これは元々の里山、自然林をひとつの都市公園として整備しています。それから、吹田市はここにJRが通っています。それから御堂筋線で上がると、江坂駅、緑地公園駅、桃山台駅、それから千里中央駅、延伸する予定の北大阪急行です。阪急電車の千里線、それと中央環状線に沿ってモノレールも通っており、吹田市の中に14駅があります。大阪東線という新たな鉄道路線が来ますが、そこにまた駅が出来、15駅になります。そういう利便性があります。

公園の話に入りますが、千里北公園、千里南公園、紫金山公園、これらが総合公園です。総合公園は市域全域を誘致圏と捉えていますので、市域全体の市民が憩える空間、公園として位置付けています。それより小さいものとして地区公園、近隣公園、街区公園、それから都市公園法に位置づけていますが、吹田市の特徴として宅地1個分から3個分程度の小さい遊園というのが300箇所ぐらいあります。全体を足し算すればかなりの数の公園または遊園を維持・管理しています。これは大阪府が管理している万博公園、服部緑地を含めると、約9㎡弱が市民1人当たりの都市公園面積になっています。

現状で、吹田市として平成28年、4.3億円の維持管理費コストがかかっています。内訳はかなり多種多様なものです。大きいのは樹木等の保持業務で、あとは公園施設・遊具、掃除等が入っています。市長は「まちの固定費」と呼んでいます、4.3億円という非常に大きなコストがかかっています。また別の側面として、市民ニーズまたは苦情が非常に多いです。苦情、要望件数が2千件を超えています。土木部で道路関係も維持管理しており、その要望等がこれに匹敵するぐらいの数があります。ですから職員は日々、要望、苦情の対応等に追われているのが現状です。また公園というのは、基本的に色んなものが地面の上に建っている、または樹が生えているのですが、道路もそうですが、インフラの老朽化が進んでおり、これらの更新等にも今後、莫大なコストを準備する必要があると考えています。

千里南公園に「パークカフェ」を設ける背景と目的ですが、市長の後藤が土木部道路公園部長の時、私の直接の上司だったのですが、「公園をせっかく持っているんやから、何か面白いことせんとあかん」と部長時代から言っていました。実際にカフェと言いだめたのも市長就任の前後ですが、カフェが目的ではないと同時に言っていました。我々もカフェをひとつ作って終わりとは思っていません。公園の今後の集客力、潜在力、または新しい形での憩いの場の空間を提供する、ひとつのパーツとしてカフェを我々に投げかけられました。やらされ感ですするという気持ちは毛頭ないので、このカフェというのをキーワードにしなが、どのような公園作りをしていけばいいのかを、ずっとこれまで検討して来ましたが、今後も検討し続けていく課題と思っています。

公園を取り巻く状況ですが、先ほどの維持管理費もそうですし、新たな利活用方策を模索していくことは当然必要です。それから大阪市においては天王寺公園、または大阪城公園で先行事例もございます。また富山では環水公園10ha、ちょうど千里南公園に匹敵する面積です。あと福岡市の大濠公園、40haですけれども、これはかなり色んな取り組みをされています。

千里南公園は、面積10.5ha、開設年度は昭和38年と、ニュータウン造成の時に都市公園として位置付けられてできた公園です。駐車場はございません。最寄り駅は阪急南千里駅。主な公園施設はいわゆる三種の神器としまして、滑り台、ジャングルジム、砂場というのはずっとあったと思います。ここでは、背伸ばしベンチ、ぶら下がりの健康器具、腰を回すツイスターのようなもの、そういう器具健康器具をかなり

置いています。真ん中にかなり大きな池があり釣り堀もあります。それから園路全体でアップダウンを含めて1kmぐらいのジョギングが出来ます。それから小さいお子様向けの遊具もあります。10haのうち、かなりの面積が池で占められています。この公園の特徴としては、全体の散策またはジョギング出来るようなコースと、それから円形広場はフラットな場所ですが、色んなイベント、夏祭りとか吹田まつりとかするのですが、それからややコンターがあり小山になっているところもあります。そういうところから池に対して、色んなところから見渡せる形になっています。この下に阪急の南千里駅があり阪急電車が通っています。写真のように非常になごむ空間かなと思います。これが散策路です。10m以上の樹木が生育しています。55年経てかなり大きいです。先週の台風21号で市内全域で120本強の樹木が倒れました。あと、北側に戸建てがあります。こちらは道を隔てて団地、マンション等があります。こちらにはホテルがあつて公共的な空間があります。こちらが道路を挟みマンション、団地があります。ですから、駅を除けば全部周囲は住宅に囲まれた公園です。先ほどの写真は桜が散った後ですが、桜とか梅がかなり豊富です。また、もう少しすれば紅葉が木々を染めて、写真を撮るにも良い空間かなと思います。他で図書館とか体育館とか作っている公園があるのですが、この公園にはそういうものは一切ありません。

「パークカフェ」ですが、都市に生活する中で、何も無い空間、オープンスペースというのは、情緒的に、我々人間にとっても良い空間と思いますが、それだけで胡坐をかいているのではなく、何かもう一つインパクトを与える必要があるというのが「パークカフェ」に期待しているところです。欧米はでコートを着て寒い中公園を散策するという風景があると思いますが、なかなか寒い時期に公園を憩いの空間として認識している人は少ないと思います。そういう面では、シェルターの的に外気を遮断する空間を作れば、公園の中で憩いの時間を過ごして頂けるのではないかと考えています。あとは誰もが立ち寄れる、それから緑のオープンスペースがあるので、景観論になるかと思いますが、視点場をどのように組み立てるのか、そういうのも考えていく必要があると思いますが、そのひとつに「パークカフェ」に期待しています。

スケジュールですが、昨年度、「パークカフェ」整備事業始動ということで予算を頂いて色んな検討を始めました。それからアイデアコンペを行いました。これは直接カフェの事業者を選定するのではなく、カフェにちなんで公園の利活用にどのような可能性があるのかを広くPRする手段としてさせて頂きました。また社会実験とアンケートを実施しました。アイデアコンペの審査は、約10個提案があり、その中の6個ぐらいに賞を設けて審査させて頂きました。今年に入って、実際のカフェ事業を展開していく事業者の選定するために、要項作り、説明会開催、選定会議、優先交渉権者を決定しまして、8月に優先交渉権者、「オペレーションファクトリー」という会社と基本協定を締結して、カフェに向けてすり合わせをしているところです。

ここに駐車場を計画しています。この星印の辺りにカフェを設置して頂けるように話をしています。ここは、公園を眺めるには絶好の場所と考えています。

お金については、基盤整備は行政が行います。先ほどのところに下水、水道などのインフラを作ります。それからフラットにするのも市がします。あとは事業者の自己資金で、設計、建築、営業を行い、一定の面積をお貸しするので使用料を頂きます。都心のビルに比べたら桁が三つぐらい安い金額かもしれませんが頂きます。実際の運営に関してランニングの補助はしません。それから最大20年間お貸しして更地にして返してもらうという話にしています。お店としては単にカフェをするだけではなく、色んな形でのワークショップ等をして頂ければいいと思っています。またイベント開催など、事業者と議論していきたいと思っています。店舗デザインもちょっとおしゃれなものを作って頂きたいなど。あと、吹田の農家で作った食材を使用して頂いたら良いかなど。これからまだまだ細いところは詰めていくのですが、これはパークですが、もっといいものを作ってくれとお願いしています。

基本協定した会社の概要ですが、「オペレーションファクトリー」という会社です。ホームページを見て頂ければ、この会社がどんなところでどんなことしていると分かると思います。タリーズとかスターバックスのような、ひとつのブランド名で全国展開しているのではなくて、それぞれの店ごとに名前を付けて色んな業

態を展開しているところで、ある意味柔軟性をもっている会社と考えています。これが選んだひとつのポイントです。「てんしば」にも出店されています。

それから台風21号で樹が倒れているという話ですけれども、10年前の台風の時には約500本倒れました。今回は120~30本倒れています。この樹は確か直径70~80cmです。もし人が居れば大変なことになっていたと思います。行政としても、公園をいかに安全に楽しく使って頂けるか、何千件の要望、苦情の中で日々格闘しているところですよ。ですから今日、色々な話を聞かせて頂き、少し頭を柔らかくして、また前向きに公園を頑張っていきたいと思っています。

ショートプレゼン「千里公園におけるCafé Au Caféの取り組み」 関西大学大学院理工学研究科修士課程 長峯佳代氏、中村穂希氏：

私たちは「café au café」、通称オカフェという名前で、千里南公園で月に2回コーヒーを売っています。岡先生からカフェやらない？という一言と、吹田市が「パークカフェ」事業をするという話が合わさり、去年の9月から千里南公園で活動を始めました。社会実験のterm1と、先ほど説明がありました「パークカフェ」アイデアコンペの話、社会実験term2、社会実験term3という順番で発表していきます。

まず社会実験term1について説明したいと思います。2016年の9月15、16日の2日間、関大がヒアリング調査、吹田市がアンケート調査を行いました。これが当日の様子です。公園に溶け込めるようなカフェスタンドを作りコーヒーを振る舞いました。このスタンドも自分達で設計してDIYで作りました。コンセプトはスーツケースで、電車で持ち運びができるような屋台を作ろうということでコンパクトにしました。中にカフェ一式必要なものが入るようになっていきます。大学で作って、それを電車で公園まで持って行きました。そのとき一緒にオカフェエプロンを作りました。今着ているこれです。黒字の布に白の紐ということだけ設定して、それぞれ好きな形のエプロンを作りました。

公園で振る舞っていると、散歩している老夫婦や遊びに来た親子、ランニングしている方など、多種多様な人がいることが分かりました。また、コーヒーの匂いにつられて人が集まって、知らない人同士に繋がりが生まれるシーンも見られました。また公園の多様な場面を活用するために、夕方から夜にかけてもオープンしました。term1の社会実験で多かった意見を紹介します。まずカフェが出来ることが嬉しいという声が多くありました。千里南公園を日常的に使っている方が多かったのも、樹を切るような大きなカフェはいい、この環境が壊れるのはもったいないという意見も頂きました。気軽に立ち寄れるカフェが欲しいという意見も多く頂きました。意見を聞いて、ランニングや散歩、お昼ご飯、休憩など様々に使われている千里南公園は、既に多くの人に愛されていると感じました。同時に今の公園の良さを失ってはいけない、今の公園を使っている人を大切にすべきと思いました。また住民が自分たちの公園であるという愛着を持つことで、公園に関心を持ち、自発的な行為が生まれ、美しい環境が保たれると感じました。

その後10月に、「パークカフェ」のアイデアコンペに、社会実験で考えたことについて提案をしました。タイトルは「公園に暮らすまち、千里」です。結果は最優秀賞を頂きました。千里南公園は、千里ニュータウンという広い視野で見た場合にも重要な位置付けにあります。千里北、千里中央、千里南という3つの地区の中の南地区には、千里南公園と南センターがあります。公園内には既存のコンテンツとして、円形広場や、子供広場、緑のステージ、桜並木など色々あります。池が常にどこからでも見え、また高い樹が育っている公園です。

提案では”ハレの場”と”ケの場”に分けて、”ケの場”に新たなコンテンツを入れ、よりパークライフが充実するよう考えました。具体的には3つのコンテンツを挿入すること、パークマネジメントについてです。

まず3つのコンテンツについて、1つめは「コーヒーステーション」です。これは最小限の建築物で構成し地域の事業者の参入を可能にしています。次に「フリースツール」です。持ち運べるツールを設けて

自由に自分の場所を作ることが出来ます。3つめに「ナッディングロット」です。小商いを認め日常的な出店区画を準備することで、小さく働きながら暮らす新たなライフスタイルを実現させていきます。

次に公園指定管理者による自由なパークマネジメントについてです。先ほどの3つのコンテンツの管理者としてカフェのふりしたパークマネージャーを設定します。現状では市が全てを管理していますが、パークマネージャーが入り、市は行政としての後方支援として活動の場を広げていきます。そうすることで、公園の価値が収益に繋がるのではないかと考えています。例えば自由な発想でマネジメントできるようになることで、チャレンジショップなど出店の安定性につながります。他には公園のマルシェを開くことで、公園に新たな風景を生み出すことが出来ます。

最後に市民グループと連携し、市民の花壇などを設置することで、現在行き届いていない除草など、公園の美化を促進できます。

以上のような提案をコンペでしまして、公園の“ケの場”に挿入することで、より豊かなパークライフの実現に繋がりたいと考えました。コンペの背景には、「パークカフェ」整備事業があり、そこで千里ニュータウンについて研究を行っていた私たちの研究室では、千里南公園を生かし、いかに利用して行くべきか実践研究していくことになりました。千里南公園の利用のあり方を考えることは、千里ニュータウン全体の公共空間の利用にも影響を与えるのではないかと考えています。

「パークカフェ」コンペで最優秀賞を頂いたことから「公園に暮らすまち、千里」を活動のテーマに掲げ、千里ニュータウンでの暮らしがより豊かに感じられる公園のあり方を考えています。そのような公園のあり方を実現するために、新しい公園の管理運営手法が必要とされており、それを検討するために、「パークカフェ」による継続的な社会実験を行うことにしました。「パークカフェ」による社会実験は、オカフェを使ったアクションリサーチを実際に市民に見せることで、公園にカフェのある風景について住民の意識の幅を広げるという効果もあります。

そして1月からのterm2では、「花とみどりの情報センター」と共同でヒアリング調査の継続、許可をとってコーヒーの販売、カフェ以外のコンテンツの考案も行いました。露天営業可能とするためにシンクを設けたり、消火器や屋根をつけたりなど、新しい工夫をした屋台を制作してコーヒーの販売をはじめました。カフェの横には持ち運べるフリースツールも置きました。このツールはワークショップをして自分たちで作りました。こうやってコーヒーの待ち時間、コーヒーを片手に公園の利用者の方に千里南公園についてのヒアリングを行いました。また、場所を変えて反応を見ました。term2を終えて、千里南公園は子供や子育て世代、高齢者と様々な世代の市民に利用されていることが分かりました。オカフェのある風景を、多くの人が喜んでくれました。そこで多世代に利用される千里南公園は、彼らが混在する風景の生まれるポテンシャルがある、オカフェのように公園でより自由に活動したいと感じ、それを実現するための仕組みづくりをしたいと思い、社会実験を継続することにしました。

そして今年度の4月からterm3が始まりました。今年度は市民の公園利用実態観測とヒアリング、フリースツールによる新たな公園利用法の実験、千里南公園のマルシェなどを行っています。今年は「居たいときにいられる私の場所」をコンセプトに、公園が日常生活の舞台となり、私の居場所と感じられるような公園のあり方を目指しています。公共空間において、住民が自ら公園を設えることが出来る仕組みを提案し、主体的に関わる事が出来、住民にとって居心地の良い公園作りが必要ではないかと考えています。公園全体の使われ方を調査するために、オカフェの前から、一周小型カメラを持って公園の利用実態を調査しています。地図を持って、どんな人がどこにいて何をしているのかプロットしていきます。オカフェの営業中、4回実施しています。ピクニックをしている人が多い場所や、野鳥を撮るポイント、ランニングの休憩に使う場所などがちよつとずつ見えてきます。今回の社会実験により、調査の効果をあげるためヒアリングシートを作成しました。コーヒーを飲んでもらいながら、学生がヒアリングしています。千里南公園を訪れる目的で一番多かったのは散歩でした。他にウォーキングやランニングで、公園を1周回れるのでコースとして使われていることが分かりました。また毎日訪れる方が多く、日常的に千里南公園を通り抜けることが多いと分かりました。好きなどころでは、一番多かったのは緑が多いところと池があることでし

た。自然が多い千里南公園が好かれていると思います。また無償でツールを貸し出すことで、場所に
応じた自由な公園利用が実現できるかを実験しています。このように池を向いて、ツールを並べたりし
ています。またツールにも本棚を設けて、色んな種類の本を出して子供から大人まで寄れるような場所
にならないかという実験も行っています。

term3では、関わる人皆で考えるマルシェ実行委員会を立ち上げました。将来的に「居たい時にいられ
る私の場所」というコンセプトに向い、マルシェ実行委員会がパークマネジメント組織になるようなプロセス
を考えています。公園づくりを考えることから、まちづくりを考えるきっかけにならないか、発展していけな
いかと考えています。そこで今回11月3日に行われる花と緑のフェア内で、関大マルシェを企画し出店
者を公募しました。千里南公園が大好きな方、特技を活かしたいとくすぶっている方、公園で新しいこと
をしたい方を募集しました。結果、応募された方達は、子供を巻き込んだワークショップをしたいという方
や、公園のユーカリの樹に関連したアロマワークショップをしたいという方や、手芸が得意なのでちょっと
公園でやってみたいという主婦の方など、5組がマルシェに参加することになりました。これからその5組
の方たちが、公園作りになんとなく関わって、人と人が繋がっていけばいいなと考えています。

10月14日のオカフェの営業時間に絵手紙のワークショップをしたのですが、通りすがりのお母さん達
が声をかけてくれたり、何だろうと興味を持ってくれたりしました。誰か宛に書いてポストに入れたらいいな
と思っています。これからは市民の方の声を聴きながら、一緒に公園のあり方や千里の街について考え
ていきたいと思っています。市民が主体的に関われる公園を目指していきます。

講演2「健康都市づくりのための公園マネジメント」 株式会社公園マネジメント研究所 代表取締役 小野隆氏：

都市公園は、もともと都市に住む方々の健康に資するための公の施設ということで、明治時代から作ら
れてきたという経緯があります。今、日本だけではなく世界中の国々で、都市には大変多くの方が住むよ
うになり、その都市環境をどう良くしていくのかという状況で都市公園はとても大事な役割をすることが再
認識されています。今日は一つ目に健康都市について、今日本が置かれている現状と都市公園にどん
なことが出来るのかということ、二つ目に、私どもがモデル実験で公園からの健康づくりに取り組んでいる
こと、それから官民連携の新しいスキームを話していけたらと思っています。

健康都市というのは、国際的な健康都市連合、Aliance for Healthy Cities という WHO の機関がありま
す。日本でも1980年代頃から、東京都などの都市で、健康に役立つ都市づくりをしましょう、生活の質を
向上させるためにどう都市を作っていけば良いのか、ということが研究されていました。2003年に世界的
に様々な都市の取組みをお互い参考にしようと、この連合が作られています。健康都市プロジェクトの重
要な特色は、実は高度な政治的関与ということ。部門間の協力とか、地域社会の参加、要素をどうい
う風に場所に集約していくかが大事と言われていています。

日本の健康都市を宣言しているのは37都市で、それをサポートする4団体があります。取り組みのメニ
ューで掲げられているのが6つあるのですが、身体活動・ウォーキングの推進、生活習慣病予防・健康づ
くり、栄養・食生活の改善、健康情報の啓発、ソーシャルキャピタルの醸成というのはそういう事に関わる
市民を育てていくということです。それから、介護一次予防ということで、50代・60代になられた方に対し
て将来に向けて準備する、情報を提供するということを、健康都市という取り組みの中で各市がやってい
る。当然ながら宣言されていなくてもこういう活動を必然的にやっているのが現状だと思います。

日本では前のオリンピックの時に人口は1億を超えましたが、その時65歳以上の人は実は5%以下。
今度、2055年にまた1億人の人口に減少します。この時、今の30代・40代の方々が65歳以上になっ
て、その人口が超高齢化40%を超えるという、同じ1億人でも全然違う内容になります。

一方でどんどん医療費が上がっていく。これはなぜかという医療費のうちの約3分の1、10兆円ほどが生活習慣病によるものと言われていて、生活習慣病の予防は、1に運動、2に食事、3に薬と言われてもう20年以上経つのですが、厚生労働省が調べている生活習慣で、週に2回以上運動している数が3割というのが一向に変わらないのが現状です。横にグラフがありますが、実は60代・70代になると皆さん身の危険を感じて運動されています。60代で40%ぐらい、70代で50%ぐらいの方が、週に2回以上運動するようになって来ている。ところが、今若い人たち、30代・40代の方というのは、3割の平均以下、場合によっては20%に届かない状況です。今、お年寄りの元気な方なら良いですが、この若い方々が年を取って、2055年を迎えた時にどうなるかというのは危惧するところです。

これも厚生労働省が出している「メタボリックシンドロームの恐ろしい川の流れ」、最上流からだんだん不健康になっていく絵ですが、医療というのは悪くなった時にお世話になるところ、健康な生活というのは、楽しそうに遊んだりバランスの良い食事をとったりしているのですが、実は川下で医療に関して色んな施策をしても、どんどん上から流れてくる状態であれば、医療費の増大は食い止めることが出来ません。元を断つ、そういう役割はどこにあるのかというと、これは地域包括ケアの絵です。一番上に病気になったら医療、介護が必要になったら介護となっています。いつまでも元気に暮らすために、というところに生活支援・介護予防というところは、老人クラブだとか自治会・ボランティア・NPOと書いてあります。この絵は何か？ここでは公園じゃないかなと私は見えるのですけれども、どうでしょうか。この予防というのを、私たちはこれまで健康のためには医療が必要と、無医村は困るとかそういう風に思っていたわけです。お医者さん、病院の方に皆さんの使命は何かと聞くと、市民の健康を守ると答えることが多いかと思うのですが、果たして健康を守るのはお医者さんでしょうか。市民それぞれが食事に気をつける、運動をしよう、そしてお医者さんは悪くなった時お手伝いをする、それが包括ケアの絵だったと思います。

次に、このギアの絵を見せてくれたのはアメリカの保険会社の副社長です。彼は公園での色んな生活習慣の改善に関わる運動に対して、大変な寄付をしてくださっています。なぜかという、これは人の健康を維持するための要因を示したのですが、まず家庭環境・遺伝、ファミリーヒストリー、どのような生まれの方なのかということが30%です。もう一つ、医療行為はなんと10%しかないのですね。次に個人の習慣、これは後天的なもので、これが40%ぐらい。それから社会的要因、周りの環境、どんな食べ物が好まれているか、どんなものがあるのかが20%、なんとこのピンク色のふたつのギア、これが60%なのです。彼曰く、公園は色んな人が来るし、色んな方々、色んな世代の方が来る、色んなことを話す、そういう場所でこそ個人の習慣とか社会的要因に関わることができる、だから公園に期待していると。

これは病気を医療で治すのではなく予防する方にシフトしようという厚生労働省と経産省の話。これに則って経産省では健康経営みたいなことを言っています。また元に戻りますが、公園は何に役立つかという話になる。運動習慣のある方を1割でも増やそうというのが僕らの考えです。場所の提供と機会の提供ということです。今までは場所だけあれば皆来てね、という話だったのですが、もう少しプログラムだとかサークルだとか、仕掛けでそういうことを推進すれば習慣が変わるのではないかということです。運動でリフレッシュすることは皆知っています。運動習慣がある方は変わらないのはなぜか、公園に来ている人に聞きました。運動というとちょっとしんどい、子供達は楽しく走り回っているけど、大人になるほど運動嫌い・体育嫌いという話が出る。厚生労働省と文科省のデータでは好きと答えている人が多いのですが、実はこれは日本体育協会である学年をずっと追跡したという話を伺って、なるほど実感に近いと思うが、運動が嫌いな人は何か色々やって、バッターボックスに立っても「お前三振かよ」とか言われたり、上手な子にはやっぱり引け目を感じたり、走るのが遅いのがあまり我慢できなかったりという風に、だんだんと運動しようと言われても嫌だと思ってしまう、運動は辛いものだ。そんな中でいくら運動が良いよといっても、成功体験をさせてあげないと習慣を変えていくことは出来ない。

それで私たちが考えるのは、公園には運動の好きな人も運動嫌いな人も、若い人もお年寄りもみんな来ている、病院は病人しか来ていないですが、まず最上流にいる方々にアプローチすれば、要望に役に立つのではないかとということで、ワークシステムとヘルスケアシステムを結びつけて公園から健康づくりを

しようということで、「公園から健康づくりネット」という社団法人を立ち上げています。ネットワークと言っているのは、今は指定管理者制度とか様々な形で公園が互いに競い合っています。で、公園は色んなことをしないといけないので、現場の方は忙しく大変。そこでまた新たなことをするととてもカバーはできないという話が多かった。それでいくつかの指定管理者の方とネットワークを組むと、少しずつ人員や情報を共有することでひとつのサービスを展開するという実験を5年ほどして、この法人を立ち上げています。

事業の特徴。その人に合った強度で運動する。歩こうという話もありますが、実は歩くだけでは十分じゃないと速歩の能勢先生の研究で証明されている。単に1万歩歩けば良いという話ではないということです。複数の公園で同じ品質のプログラムを提供出来ないだろうか。近くにいる方の色んな能力を生かすことが出来ないか。もちろん緑の中で運動するというのはこんなに気持ちいいことはない。誰でも参加出来る。6番目の楽しく続けられるは、とても大事な話です。

実は適正運動強度という考え方があります。1985年にはもうアメリカのオリンピックの強化選手に適用されたある理論があり、実は日本で作られた。スロージョギングはご存知と思いますが、福岡大学の田中教授、箱根駅伝に出たくて筑波大に行かれたのですが、心臓に病気が見つかったことがあって(のちに誤診だったことが判った)選手を諦めざるを得なかった。ところが、運動負荷を落としても基礎体力がつくという研究を始めたわけです。そこで出てきたのは最大酸素摂取量の50%の運動をしようということです。今は高血圧学会で中程度の強さの有酸素運動をしましょう、それから動脈硬化学会で最大酸素摂取量の50%の運動をしましょう、それから糖尿病学会で最大酸素摂取量50%前後の運動をしましょう、この最大酸素摂取量というのは何か。実はLT値という、血中乳酸があるところで急激に増えるというデータがあります。何が変わるかというと、代謝の、体の中のミトコンドリアで使うエネルギーの量が変わるという話なのです。ここは簡単にいきますけれど、ゆるい運動をしている時は糖と脂肪両方を燃やしてエネルギーを作っている。ところが、あるところまでくると脂肪を燃やさないで、糖だけからエネルギーをと摂るようになります。これが原因で血中の乳酸がたくさん出る。乳酸がたくさん出ると息が上がる、心臓がドキドキする、いわゆるしんどいという生体反応になるのです。この辺りの最大酸素摂取量、それぞれ皆さんの固有の体調の中で決まる数字、息切れしないぐらいの運動負荷というのが身体持久力を高めるための一番適切な運動なのです。

実は公園で色々体験して頂くと、こんなんでいいの？というのが皆さんの反応です。そんなしんどい思いなくて良いのですか？これでフルマラソンが走れるようになるのですか？そうなんです、走れるようになるのです、というふうに体験して頂くことで、運動が嫌いだった人が、例えば1年前に色んな活動をしてそういう体験してもらった方が今も公園に遊びに来て下さいます。それまでは散歩ぐらいしかしない運動嫌いだった人が、ジョギングをする、マラソンに出る、ノルディックウォーキングをしたい、何より、公園に来るようになって友達が出来るようになったとお話をされています。

運動習慣がない人に何が必要なのか、定期的な運動を継続するために4つの感情的側面が研究されていますが、自覚的能力だとか自覚的社会交流レベル、それから斬新な体験、身体的な心地いい疲労感みたいな。それが成功体験だったり、コミュニケーションだったり、運動習慣がないけれど、こんなことやろうという風になること、それと心地よい運動強度というのを知ることによって生活が変わっていく。

健康への不安とニーズというのは何も運動している人だけでなく、漠然とみんなが持っていることなのです。先ほど健康都市の中でも、子供たちとか色んな方にサービスをしているのですが、場の提供という話をされているが、ガイドラインの中には公園という言葉がひとつも出て来ないのです。職場だとか学校だとか、地域の、ということが書かれているだけで、場所が示されていない。仕事場ではなかなか運動がしにくいではないですか。でも公園だったら皆リラックスしている、運動もすぐ出来るという中で、まず我々はイベントをしました。イベントをすると、高齢の方が一杯来て下さいます。でも30代・40代は来なかったのです。スポーツしない人もなかなか来ないです。それで色々工夫して、公園だから、特に健康づくりだとか言わないで、色々して騙し打ちみたいなのですが、その時イベントに参加してくれた人が色々書いてくれたフリップです。楽しい、面白かったということです。ターゲットは若い方、もちろん高齢者の方にも参

加してもらいます。モデル実験です。我々のやっているのは何かというと、きっかけ、多くの都市でも健康イベントというのは1日あります。参加して色んなことあって、じゃあ明日からやる？と聞くとやりたいねと皆言う。でもやらないのです。なぜか？1人ではね、公園でそんなことやる人いないじゃない、と言われました。では我々はそれを小出しに、いつも公園に行ったら何か運動している、一緒にしましょうと言えるような環境を作ろうと。

それからウォーキングしている方にアンケートしました。どうですか？あんまり変わらないのだけど、やらないよりやった方がマシだろうみたいな話。そういう方々に適正運動強度みたいな話をすると、皆さんが持っている体力の中でしんどくないけれど全身を使う運動、息が切れないけれども身体持久力が高まる運動を経験してもらおうと、歩くより楽だね、みたいな話があるのです。その人に合った強度で運動を提供する、ニコニコペースという話をします。運動強度にすると、安静にしている時を1メッツ、それに対して2倍の酸素を体に取り入れる運動が2メッツ、3倍なら3メッツ、歩くのは3メッツぐらいです。皆さんの体力というのは、もっと高いところにあります。20代・30代の方だと、14メッツぐらいの酸素を取り入れる。安静にしている時の十何倍の能力を持っている。それで歩けば確かに運動不足は解消されるかもしれない。でも、もうちょっと工夫すれば体力は本当に付くことが分かるということです。そういうことをやりながら、セルフコントロールをする。「ヘルシージョイクラブ」、このチラシ、若い30代・40代の方が参加したくなるようなプログラムを作っています。プログラムの中にだいたい何メッツぐらいの運動ですということが書いてあって説明しています。トライアルとして毎日やろう、目標として1つの公園で500回 / 年間で、これを経済的にも成り立たせるとというのが僕らの今取り組んでいる仕組みです。

これがやっているところですが、皆若いでしょう。これはインナーマッスルヨガ、これはポスチュアウォーキング、フラダンスはちょっと年齢が上がりますが楽しそうにやっています。ムーブメントエクササイズというやつ。

でも、今やっていたところはとても良い芝生だったのですが、実際、色んなところで展開していこうと思うと、実はこんなところ。ちょっと裸足になってフラやヨガをしたりする環境ではないですね。綺麗にペイブされているのですが、これもなんか運動がしたくなるような環境じゃないですよ。でもこうなっていたら良いよねということです。次にも出てくる話ですが、芝生で寝転がってますね。

我々が取り組んでいる、運動習慣がある人を10%増やそうというのは、具体的にはたとえば20万都市だったら、2万人の方が週2回運動すれば延べ200万人・回という数が出ます。どこでやりますか、体育館もう一杯ですよ、体育館はだいたい年間延べ4万人から5万人使うように作られていますから、50館作るんですか、ということでアンケートしました。運動するならどこでしますかと聞いたら、45%が公園・河川敷と、みんな分かっているのです。これを引き受けるためにはどうすればいいか、ああいう、走りたくなる、寝転がりたくなる、運動したくなるような場所が大事ということです。それから運動習慣を維持するにはどれぐらいの距離、例えばスクールに複数回通ってもらうためにGISでデータを取りました。そうすると2kmと3kmの間にとっても大きなギャップが出てきました。実はリピート率で見るとあまり変わらないです。魅力があるから皆来るのです。ところが回数を見ると、3km以上になるとガタンと回数が3回以内に下がります。2km以内だと2ヶ月に6回以上来てくれます。ということは、近いところでないといけないのです。生活習慣をやるのは2kmの範囲、例えばこれは枚方市の地図ですが、市域に10箇所ぐらい公園があって、できれば500㎡ぐらいの芝生があれば良いなど。どれぐらい掛るのか。5000万円、維持費が500万円。でも、2万人の方が運動習慣すると医療費の削減、複数の研究で年間1人当たり10万円ぐらいの削減が望めると報告されています。2万人がやると、20億円を削減できる可能性があります。いかに投資とのバランスがあるか、今我々が研究しているところですし、様々な分野の方と意見交換しています。データが出て来るのは25年後とか言われています。でもそれを待っている場合じゃないのが現状と思っています。可能性があるなら挑戦したい。

全国に10万カ所の公園があります。10%の公園に500㎡の芝生を作るとしたら500億、維持費50億、それで国民の5%が運動するようになったとしたら、0.5兆、抑制率からすると年間2兆円近く変わっ

てくと予測されます。費用というのはどういう必然を見るのか、適切な設備があり、ここでどんなプログラムとどんな心地よい屋外空間があればそう仕向けられるのか、今、全然増えていない3割の人から、4割の人が運動する日本の社会に変えていくのは、どういうことなのかという事例です。

官民連携のスキームなのですが、今まで距離だとか、事業するためのコスト、広報のあり方、どういう圏域で来るのか、それから払ってもいい費用はどれくらいの価格帯にあるのか、継続するために何回ぐらい教えて後はどのような仕組みで継続するのか。やるためにはやっぱりお仲間が出来るというのはすごく大事なことで、有料なスクールがあった後は、サークルに入ってもらおうとか実験しています。公共の方で行って頂くこと、施策の位置づけ、総合政策部局による調整、関係部局の連携、健康都市づくりでも言われていた総合的な判断が要るということ。健康部局は、例えば公園・都市づくりというパーツとなかなか交流出来なかったり、そこに何を求めるのか、健康阻害要因が何なのかとか、そういうことはアプローチ出来ない。そういうのを総合的に出来るというのは、全体で取り組むということ。広報協力、市民への周知、これがなかなか難しいのです。民間だけでは出来ない。自治会の掲示板を使う、回覧板に回してもらう。公園での行為許可、これは行政でないと出来ません。それから民の方はプラットフォームになる組織が必要です。1企業ではとても出来ません。色んなサービスを展開するのに、それをまとめる役割が必要です。都市公園ひとつの所でやってもしょうがないです。さっきのところみたいに10個とか、隣の都市とか併せてそういうことをやらないといけないということです。民の方ではそれに乗っかる協力団体、フィットネス協会、それから企業、健康経営をすることで、保険会社、予防プログラムをやるということになります。

費用を概算しました。約8000万です。8万人が参加するのだったら、一人当たり参加費1000円です。これを、健康格差の是正、例えばずっとジムだとかクラブに行ける人はやはり限られていますね。何回か自分で出来るようになるということが目標です。それでこういう仕組みが入ると、公園のネットワークでインストラクターがちょっと教えてくれて、4回もやれば後は自分で出来る、という仕組みが出来るはずです。それからヘルスケアの産業も商店をこうしてやっているけれども、ネットワークすれば、そんな中でサンプリングできるし、使い方、意見も聞けるということ。

それから中小企業、ひとつひとつの企業で効果的な予防措置、健康診断だけじゃなくて、具体的な方法を教えられるか、場所が提供できますかということ。ならば近くに公園があればお昼休みに行けるかもしれない、そういうプログラムがあるなら月に2回ぐらい行ってこいと教育するチャンスがあるということです。それで2万人が、4回来れば大体習慣化するというデータも出ています、それで8万人が経費ですとすれば、後は健康組合の皆さんどうでしょうか、健康経営をされる企業の皆さんどうでしょうか。言われたのは、公園がネットワークしなきゃだめだ、ひとつの公園じゃとてもだめで、それで協力することが出来ない。でも、公園がネットワークして、そういう取り組みをする行政が出て来たら、彼らは動くかもしれません。それから出て来れば、参加費1000円取っていますが500円になるかもしれない。

目指すべきは、生活者の生の声が聞ける双方向の媒体となることです。公園が健康問題に取り組むと医療費が下がるという成果を見出すことです。公園と健康寿命の延伸という社会的な大きな取り組みを、場所の提供と組織の提供、活躍の場の提供で、そういうことをやっていく。良好な公園を維持することが、人と社会に健康をもたらすということです。

実は私、「World Urban Parks」という組織の手伝いをしています。「World Urban Parks」は都市公園のオープンスペース、レクリエーション専門のグローバル国際機関。都市公園が人の健康、社会的、経済的な健全な社会をつくり、都市機能としてとても大事だということを、為政者の皆さんに知って頂くという活動をしています。例えばシカゴのミレニアムパークは、環境的にも文化的にも高い成果を上げて、シカゴで生活したい、企業力を上げたいという方を集めるのに成功しています。公園は美しいだけではなくて、環境、健康、例えば暴力・犯罪について抑止力があることが色んな都市の実践で証明されています。公園は都市が必要とする、ほとんど全ての課題を解決する場所として見直され始めています。まさに今回

法改正があった中で、政治的指導者とか、公園屋さんだけでなく色々な分野の方が参入して下さるということが、とても良いことだと考えています。

一つの委員会があります。「Health Parks Healthy Cities」というコミッティーがありますが、今までこれほどまでに都市に人口集中した経験は歴史上ない。この都市環境においてどういう風に皆が元気に年を取れるのか、それから健全なコミュニティを作れるのかという話を、公園を使ってやるために皆で叡智を集めている。世界は今日本の動向に非常に興味を持っています。なぜか。1.2億人もの人口を抱えてこういう社会になろうとしているのはヨーロッパに有りません。アジアの諸国もとても興味がある。どう日本がこの問題を乗り越えるのか、日本は最先端を行っているのですが、これを世界はとも興味を持っています。ということで、「international forum」とかを展開しているのですが、この議長を務めたギルさんが、8歳から80歳まで自由にコミュニティにアプローチ出来ることを目指して、公園のできる色々なことを提案しています。

講演3「公園を育てるころみ」

アーバンピクニック(神戸三宮 東遊園地にぎわい創出事業) 事務局長 村上豪英氏

神戸から参りました、「アーバンピクニック」という取り組みをしている村上と申します。普段公園で活動するときはこんな格好で活動していますので、それを見て頂きたかったのと、私自身公園のこと何にも知らない普通の一般市民ですので、専門的なことを知っていると思われぬように、いつもの普段着で参りました、ご無礼をお許しください。事務局長という名前ですけども、結構芝生に水をあげたり、公園にくる酔っ払いに絡まれたり、公園の荷物を片付けたりしてるうちに腰が悪くなって、ずっと座っているのがきつくなって来ました。皆さんも1時間以上話を聞いてきついかもしれないですけども、私も自然な感じで立ったりして腰を動かしてお話したいと思います。

自己紹介ですが、6年ぐらい前から、東日本大震災をきっかけにして「神戸モトマチ大学」という勉強会を開催して来ました。そのせいで行政の方と知り合いになることも増えてきて、3年ぐらい前から神戸市役所の方と、どうすれば神戸が良くなるか提案をする機会をもらったりしました。その時に思い出したのが、今からお話しする東遊園地です。ちょっと面白い名前の都市公園ですが、横浜の山下公園と並んで大変長い歴史のある場所で、この山と海がものすごく迫った神戸の三宮からまっすぐ降りた、神戸市役所のまだ南にある公園です。街の真ん中にすごい近いところで、旧居留地をルミナリエが通っていて、最後に丸いのが置いてあるのが東遊園地です。

2015年のゴールデンウィークの写真ですが、土のグラウンドのままでした。ゴールデンウィークのものすごく暖かい朝の10時か11時だったんです。掃除している人がいるばかりで誰1人いない、砂漠時代と僕は呼んでいるんですけども、砂漠のような公園を街の真ん中に放置されていた状態でした。人がいなさすぎて、僕の子供はここの土のグラウンドで自転車の練習をして乗れるようになった、そんなことしても誰1人見ていないような公園でした。私自身は公園を良くしようと思って始めたわけではありません。あくまで街が良くなるために、ひょっとしたら、この公園が変わることが近道ではないかと思って始めました。ここは市民のアウトドアリビングになれるんじゃないかと思ったり、周りの不動産価値も含めて、都心自体の価値も上げれるんじゃないかとも思ったり、コンパクトシティであるしか生き延びる方法がない、あの神戸の小さい街で、あそこが良い場所になったらもっとウォーカブルな街として皆が歩き易くなるんじゃないかとも思いました。そういうすべての出発点が、日常的に豊かに過ごせる公園にした方がいいと思ったんです。常駐する人が必要と思って、カフェのふりしたパークマネージャーみたいなものを置いたらどうかと思いました。

実はここまでの話は、神戸市役所の企画の方が良いねと後押しをして下さったんですが、公園の管理をしている部門の方にお会いすると、ちゃんとスーツ着て行ったのに、ものすごい怪訝な顔をして、「村上

さん、公園っていうのは誰も来ないからトラブルが無いんだよ、たくさん来たらクレームとか来て困るじゃないか」と、言われては無いんですけど、顔にはっきりそう書いてありました。もうできれば来ないで欲しいという顔をされていたんですが、何回も企画書を持って行くうちに根負けして、じゃあ予算はないけど勝手にやるんなら見守っていてあげよう、みたいな感じに言ってくれました。

凄く反対されたのですが、この砂漠のところを、2015年の時には力が無かったので、2週間ぐらい舗装されているところを良くしたらどうなるかなと思ってこんな風にしてみました。無理やり芝生を敷いて、こんなことすると雨降ると土が流れて大変になるのではと凄く心配されたんですけども、無理やり芝生を敷いてカフェのようなものを設置し、アウトドアライブラリーというものをつくりました。2015年の6月くらいです。こうすると、普段通っている人がつい足をとめてくれる、あるいは、周りのマンションから人が降りてきてくれるみたいなことが一杯起こりました。これ、ちょっと設えが違いますけど、2015年の秋の社会実験です。ちなみに、奥の方で一杯車が入ってルミナリエの準備をしています。この公園のスーパーラッキーなところは、市役所が隣なので、わざわざ呼びに行かなくても市役所の方が一緒に社会実験を体験してくれたことでした。社会実験という名前なので、まるで仮説の検証をするみたいですが、英語にすると多分「Pilot project」で、やっぱり体験を共有することがもの凄く大切だと思いました。一緒に何が上手く行って上手く行かなかったのかを体験することで、行政の方が一緒にこの先可能性があるというところは、はっきりと認識して下さいました。公園部の方も凄くこの方向性に可能性があると感じて下さったし、今ではもの凄く信頼感を持って活動しています。

2015年に2回社会実験したのがこの本ですが、この南に砂漠が広がっていて、鳩が一匹ちょこっと、素敵な写真なんですけど、市役所が予算を付けてここを全部芝生にして下さいました。そうすると特に何も無い時でも人が来る。空間の力はやはり大きいと思います。私たちは2016年と2017年、今日この瞬間も、芝生の横で日常的な賑わいを創るプログラムをやる事業者として認めてもらい活動するという立場になっています。2015年は、ほとんど自腹でやりましたが、2016年は約1000万の事業費のうち約300万円は市役所からの公金でさせて頂いています。あとの約700万は自分たちで稼ぐことで、4ヶ月ずつぐらい、2016年と2017年に活動しています。

これが今年の設えです。長期的に見ると、2014年に色々議論して、2015年は短期的な社会実験をし、2016年と2017年に社会実験をしています。裏では市役所の中で大規模改修の検討を進めています。神戸は今、三宮を中心に都心を大きくやり変えるぞという計画が進行していますから、公園の中にちょっと便利施設を作ろうよといった、小規模な改修に中々持って行けなくて、逆に大規模改修が見えているから、都心全体のリニューアルに合わせてあれも変えようこれも変えようという議論が有りますから、吹田市さんのように、次の一手に行けずに我々もずるずると社会実験をしているという状況があります。腰が治らないです。

日常的な賑わいを創るために何をしているか、いくつか写真で・・・カフェをしたり、セミナーを無理やり芝生の上でやったり、こういうプログラムは事務局側が仕掛けているものと、公募して他の事業者さんにやって頂いているものと色々あります。ガイドツアーみたいなものも企画しています。今皆さんのお手元に、東遊園地の今年のパンフレット兼マップをお配りしていますが、都心の歴史を感じるスポットが一杯あるので、それをボランティアの皆さんがガイドツアーしてくれています。演奏会をしたり、ファーマーズマーケットも一緒に社会実験の一環として生まれて、今では定期的なイベントとして育っています。今は別の一般社団法人として運営して頂いています。

私はこういうことをしていて常に思っていることは、公園を育てることにどれだけ多くの市民が参加するのだろう、それをずっと自分の中の唯一の指標として見ています。使われていない公園は世の中に一杯あって、そこに芝生やカフェ、イベントをすると、たくさん人が来るんです。凄くたくさん来ますし、絶対使われていない公園よりも良くなっているんですが、それは、そんなに凄くことか？とも思います。もちろん、僕だってそこに素敵な芝生があってカフェがあると行きますけど、それは次のデートの時に映画に行こうか、山に行こうか海に行こうか、ショップに行こうか、そういえば芝生が綺麗な公園に行こうかという選択肢

の中に入るだけで、消費者様に選んでもらっているくらいの存在じゃないですか。それより、やっぱり自分でそういう場所を創って行く、そういうところに公園はなれるし、なるべきではないかと感じています。

たまたまこの東遊園地という公園は、市民が声を上げることで歯車が回りだしたので、多分そこが唯一最大の東遊園地の特徴かなと思っているので、それを伸ばそうともしているのですが、例えて言うなら、使われていない公園を眺めている僕たちは傍観者の視点でしかないのだけでも、それを消費者の目線で選んでもらうことも大切だし、僕自身にももちろん消費者の目線がしっかりと有るんですが、その場所を創るのが市民だと、そういう市民性を発揮できる場所というのは他にどこが有るのかというと、私は無いような気がします。もちろん、市民活動が公民館で出来ることとか、色んな場で出来ることが有ると思いますが、空間というものに市民の活動が刻めるところは公園しか無いんじゃないかと思えますし、それを育てることで、自分たちの市民としての力が育っていく、みたいなことがあるんじゃないかと思っています。だから、今、私たちの周りのたくさんの市民の方が、この東遊園地の取り組みに参画しているんですが、その人たちは凄くナチュラルに、街をちょっと良くしようと思ったら行政に行くとかじゃなくて、自分たちが手を動かしてやるんでしょと、凄くナチュラルに思っている方が多くて、それが素敵だと思っています。

とはいっても、公園を育てるというのが具体的にどういうことなのか、普通は想像出来ないと思うので、そのひとつの手法として、我々が始めからずっと大切にしているのが、この「アウトドアライブラリー」という仕組みで、本が在ると凄く空間が豊かになるし、コミュニケーションも生まれるんですけど、この本は市民から1人1冊限定で集めているものです。何をしたいかという、本なんて中古の本屋さんで売ったら、凄く大切にしていた本でも、50円でしか引き取ってくれない、50円付かないときもある、でもその本を公園に持って行くと、公園を良くしたいという自分の気持ちが公園に残り、その本1冊分だけですが、明らかに良くなっていく。だから、ここに今ある何百冊かの本は、何百人かの市民がそこに介在したことのシンボルだし、すごく良いなと思ったんですね。ちなみに、公園を良くするために本を沢山持ってきて下さい、なんていうのは絶対にダメで、本を沢山くれと言うと、みなさん本棚の中から要らない本を何十冊でもくれるんですが、それはゴミ箱に誰も愛着を感じないのと一緒で、そんな本棚を作っても図書館に愛着が集まらないと思って、1人1冊限定にしています。みなさんプライドに懸けて、誰かにバレても誇れるような本を持って来て下さいませ。

カウンターを作るのにも市民の方の寄贈を貰ったり、これも市民から、友達から集めた、白と黄色と青のTシャツをバリバリ縫って、ガーランドを作ったり。買って来たら凄く安いんですが、こういうものを作ることで、俺も公園を良くする側にちょっと参加した、という思いを出来るだけ多くの方に持ってもらいたいと思ってこういうことをしました。

あと、公園に足を止めてもらうことで、その人々がいる風景自体がもの凄く素敵に見えて行くということを創りたいと思っています。その仕掛けは自分たちなりに色々やっていて、やっぱり一番大事なものは本なんですけど、実は卓球台が在ることで足をとめる方がいらっしやって、凄いですね、子供を背負ってでも卓球をする方、周りから見てもとても微笑ましい風景が広がります。これは今年開発したんですが、落書きし放題の公園。本当にこんなことしても良いのかは市役所の方に聞いてないんですが、皆で落書きしまくれるよ、という子供連れがわーっと寄って来て、めちゃくちゃ書いてくれます。シャボン玉なんかも、人が創る風景としては、他の人にとっても素敵なものになると思ってこういうのをやっています。プログラムの主催者になれる体験は、凄くはっきりとした、自分が公園を育てる側に回る体験だと思っていて、それは待っていても皆さんしてくれないので、違う公園で活動していた太極拳のおじいさまにお願いして、ここでプログラムをして頂いたり、アートのセミナーや、もっと大きい子供が来てくれるものもあるし、実は今、本について語り合う集会が開かれています。で、実は私がもの凄く好きなプログラムなんですけど、楽器に触れる東遊園地といいます。名前はそのままなんですけど、これは、バイオリンとかトランペットとかハーブとか色々な楽器がそこに置いてあって、みんな触れるよ、吹いていいんだよ、教えてくれるよ、というそれだけのことなんですけど、これが凄くのは、楽器を持って行くだけの行為で、自分が主催者側に回る体験が出来るん

ですね。主催者側に回るハードルが最も低いプログラムとして、大変好きです。それが繰り返される光景がとても平和的な良い感じになります。

あとは、公園の周りのベンチに設置するための机とかも、僕たちで作ってペンキで塗って設置したら、そういうことをして良いのかはよく判らないんですが、行政の方も一緒に、やっていいのか判らないプログラムに参加してくれている。子供だって育てる側に回るんだというプログラムも有りまして、本棚の説明文とかを子供が皆で書いて設置してくれています。さっきの落書きなんかも、実はプログラム化してまして、毎日こゝろ書きしてるのを夕方に大人が集まって来ていちいち皆で消すんだ、それも育てる一貫だと言ってプログラムにしています。そういう活動をスタンプラリー化したもの、そういうことを一杯やっていると、勝手にやって来て、公園でシャボン玉で子供達と遊んでくれるお兄さんが現れたり、勝手にアコーディオン弾いてくれるお姉さんが現れたり、これなんかはある日の写真なんですけど、毎日の片付け、結構手間が掛るんですが、夜な夜なやって来て一緒に片付けてくれる方とかいるんですね。こういう広がりが出て行くのが素敵なことだし、もっと広げたいなと思っています。

ざっとですが、私が経験したことをベースに公共空間についてこう感じるようになりまして、いくつか書いています。

ひとつは、公園は元々、労働力を再生産するために、お上が君たちの労働力をレクリエーションする場所だと言って造ったんですね。でも今、これからはそういう面も大事だけど、市民が主体者側として、街をレクリエーション、もう一度市民の方から創るよというポイントになれるのが公園じゃないかと思っています。だいたい市民が、そんな大それたことを考えてやりたいと思っても、ちなみにそんな大それたこと考えて街を変えたいと思っている市民は絶対に増えていると思うんですが、そんなこと思ってもそういう活動が出来るのは公園しかないと思うんです。

2つ目、街の全体最適を創る主要ピース。これは、当たり前だと僕は思っていたんですけども、中々そうでもないみたいで、公園をこれからどうしようという議論は、街を、全体をどうするかという議論の中で、だからこの公園には特にこの要素が大事なんだ、という話になるはずだと思うんですけど、その公園だけを考えておられる方の中には、中々そういう視点では考えない方も多いと感じることも有ります。これは、失礼なこと言ってたらすみません。やっぱり、この街全体のことを考えないといかん。

3つ目なんですけど、行政と市民が共同で何かをするというのは、絶対にこれから大切なことだと思うんですが、その時に、行政の方がすごく考えて、こういうスキームでこういう役割を市民に担ってもらおうと思って市民が参画するのと、市民が先にやり出すのはやっぱり全然違うと思うんですね。行政の誰かが考えたということは、その誰かの所属する部署の何かの施策にそれが書いてあるはずで、つまり、その枠内の基本的発想が飛び越えて行かないと思うんです。市民が先にやり出すおかげで、我々の「アーバンピクニック」も、行政の三部門横断で面倒見て下さっているんです。元々、横断の横断が出来てスタート出来るのは、市民が先に出たからだろうなと感じています。

これが、最後のスライドなんですけど、「リバブルシティ」という一般社団法人をつくって活動しているんですが、住みやすい街というのは、1980年代、70年代くらいから、多分駐在員を一杯抱えている多国籍企業のニーズによって世界中のリバブルシティを指標化して、ランキングして、メルボルンが良いだの、バンクーバーが良いだの、みたいな話をしているわけなんですけど、だいたい指標を見ていると、治安が良いとか、外国語で教育が受けられるとか、交通の便がどうだとか、そういうことが一杯並んでいるんです。その指標は素晴らしいんですが、全部消費者目線じゃないかとも思うんです。僕たちはそんな一番住みやすいところを選び取るようにどこか選んで住む存在だけでなく、人間なんだからどんどん住みやすい街にしていったり、自分の活躍の場所を街に求めていく存在でもあるんじゃないかなと思うんです。なので、本当は住みやすい街の指標の中に、自分がどれだけ活躍できるか、自分がどれだけ環境側に働きかけられるかみたいなことが入っていて欲しいと思うし、そういうことをこの公園もひとつの材料としながら発信できたら良いなと思って活動しています。ざっくばらんすぎたかもしれません。失礼があったらお許し下さい。

意見交換

コーディネーター 関西大学環境都市工学部 教授 岡 絵理子氏:

岡:

今日皆さん、どういふつもりで来られました？平成29年5月12日に「都市緑地法等の一部を改正する法律」が出来、都市公園の再生、活性化を目指して「都市公園法」が改正されたという話題があって、そういう話が聴けるかなと思って来られた方にとっては、その前からやっている活動がほとんどの話で、その法律に乗ったものが今回のお話では全然無かったんですが、それ以上の面白い話題を皆さんプレゼンテーションして頂けたのではないかと思います。

今回の話の中で出て来たのは、一番大切なのは、公園で何かするということが公園のためにやっているのではなくて、その先にあるもっと大きなこと、ひとつはまちが良くなること、それから人々が健康で幸せに暮らせること、おそらくそういうことが公園を使って何かをするということの、パークマネジメントの先にあるような、経営と利活用という話ですから、そういう活動が紹介されたと思いますが、まず吹田市は今、公園の中にカフェを造ろうということ、市長の想いもあって進められているのですが、今のお話を聞かれて、これは是非取り入れたいとか、もっとこんな先があるんじゃないか、ということはどう思いますでしょうか。

松本:

実は吹田市の摂津市と接しているところにJR岸辺駅があるんですが、北千里にある「国立循環器病センター」が移転します。うちの市民病院が、今吹田市の真ん中にあるんですが、それも移転します。そんな中で、「健康北大阪」と「健康医療都市」というプロジェクトを吹田市でやっています。小野さんの話を聞きながら、本当を言えばそっちの部署の人間を呼んできて説明させた方が今日の話に近いと思うんですが、かなりの部分、芝生を今作ってますし、現に芝生を作ったところを今うちで管理しています。今の健康プログラムというのを聞いて、我々が取り組んでいるのと全く一致しているなど。今、そのハードはかなり出来てきているんです。ソフトをどのようにして行くかということで、まさに村上さんの主催者であり、健康プログラムの話であり、太極拳とか色んな話とか、ウォーキングコースも作っているんで、健康というのをニーズとして捉えながら、世界最先端の医療機関が来る中で、どういう形で健康維持していくか増加していくかと市も取り組んでまして、非常に参考になる意見かなと。特に数字で示されて、20万都市の健康にすると、どれだけのメリットが経済的にもあるかと聞いて、行政がする上で非常に参考になりました。

それと、村上さんの話。私も実は神戸に住んでいるんですが、聞きながら、かつてNHKであった「プロジェクトX」を観てるが如く非常に感動しました。非常に良い取り組みしてるなど、吹田市も小さい公園から大きい公園まで500ヶ所くらいあるんですが、ネットワーク組みながら全然活用されていないところも数多くあるので、それをいかに活性化して行ったら良いか非常に参考になりました。まさに公園を維持するのが行政の目的ではなくて、どう活用していくか、またはどのように憩いの空間を創って行くかが目的なので、主人公は市民なので、そういう面でまた改めて良いお話聞かして頂いたなど感じております。

岡:

今日の2つのお話ですが、公園の中で展開される様々な行為、こういうのが出来ればもっと良い公園になる、こういうふうにやればまちがもっと良くなるという話だったんですが、今回あまり大きく出てこなかった公園許可というのがありますよね。公園でやって良いこと悪いこと、公園の中で運動するにしても、営業的にやるとやはり問題になるとか、それがちょっと気になるところで、実は私たちの学生が営業許可を取って、カフェでコーヒーを売っています。ほとんど交通費も出ないんですが、それでもやはり道行く人たちは、何でここでこれが出るの？みたいなことを必ず聞かれます。公園の中でこういうことをしちゃいけない

い、占有することにもなりますし、他の人がしたいと思っていることを邪魔することにもなりかねないという中で、どんな工夫をされて実現しているか、あるいはどんな工夫をしていきたいと思っておられるか、その辺りを教えて頂けますでしょうか。

村上：

ちゃんと答えられるか分かりませんが、公園はどんな方でも利用できる場所だし、そうあるべきだと思っています。私が活動している東遊園地は2.7haしかなくて、そのうちの芝生部分はわずか3000㎡くらいしか無いんですね。なので、例えばちょっと大きなことをして占有してしまうと、他の人が使いにくくなるということはやっぱり気にしていますし、ましてや、行政の方とも入場料を取るようなプログラムをやるかどうかは大分考えたんですが、今のところ、公園で費用を払わないと参加できないことが多発するのはやはり良くないということで見送っています。ただ、そこに踏み込むかどうかで、広告や協賛収入に頼った公園運営になるか、違う収入の面が開けるかは大きく変わってくると思うので悩ましいですね。

もっと悩ましいもののひとつは音で、あっち向いてもこっち向いても音だけは聞こえてしまうから、あんまり音を多用すると他の公園利用の方に迷惑になって、規制されてようがなかろうが、常に、違う目的で来られた方の迷惑にならないような公園を維持することにかなり気を付けています。でも、本当難しいですよ、ちょっとギターをかき鳴らして練習する方はむしろ好ましくて良いな、みたいなのがあるかもしれないんですが、その方が3人になったらやっぱり既に騒音ですし、路上ライブみたいなものを突然始められる方も中にはいて、その方に、それはダメだけど練習は良いと言う根拠なんて何も無いんですよ。だから、公園にずっと常駐して、我々が頭を下げて、こういうことだから止めたほうが良いと言うと聞く耳を持ってくれる方が多いんですが、これが行政の方が制服着て言ったら、クレームを言われるようなケースがあるんだろうな。民間がやるから、まだルールにもならないルール、マナー・エチケットみたいなもので何とか協力頂いてやり過ごしている面もあります。

岡：

小野さんいかがでしょうか。

小野：

私たちのプログラムは取って1000円取って運営していますが、実験的なこととして容認して頂いてたり、もしくは、指定管理者の方の実施事業の一環として位置付けて間接的に容認して頂いています。来年度以降は、1プログラムにつき、好況下で費用が出るよという話は、やっているんですけど、費用が出た途端に出来ないんですよ、成り立たない。結局公園で何かをすることについて、コストが掛るということをちゃんと証明して行きたいと思っていて、それが必要であればやっぱりできる仕組みをつくって行かないといけな。最初に大上段の話をしたんですけど、じゃあ何もしない公園で良いのかという問題はあるので、そこに一石投げかけたというのが、今回の、営業行為も良いよ、ただし費用も取るよということです。ただ公園自身が稼ぐことが得意かという決してそうではないと思うんですね、提供する場所なので。

マネジメントの中で得意を活かしなさいというのは凄く大事です。本当にお金儲けるんだったら、公園なんか止めて商業ビル建てれば良いんですよ。じゃ、公園が本来、まさに、皆に何が出来るのかを考えて、許可を出したり、何かしていく。そこは皆で考えていくということもあるだろうし。一方で、為政者の、政治的な判断ということも申し上げました。これは、市民が市長を選挙して決めるとか、公園はその中でどういう位置付けになるのか、まさに公共というのがどういうことなのか考える、社会制度を考える、という意味で、とてもトレーニングされる空間でもあると思うんですよ。これは、民主社会の中でどう位置付けていくのか。他人事じゃなくて、そういうフィールドでも我々自身が試されている状態と思っています。

岡：

公園という公の字が付いていますから、公共の持っている空き地という意味ではないですものね。そういう意味ではなくて、やはり、市民に提供している園、公園なので、そこでやられる行為というのは公共的にも、もちろん公共性を持った、市民のためのというのを強調しなければいけないと思うんですけども、松本さんは、大きな話を聞くのは本当申し訳ないですけども、少なくとも、これからの吹田市で松本さん自身として、公共はこういうふうに公園と付き合いに行きたいと思っておられるかをお話ください。自身のお話で結構です。

松本:

どう関わって行くかという、公園行政そのものを我々はしているので、当然ですけど使う人、市民の持ち物なので、市民が憩える空間を創って行くというのが命題だし、やっ行って行くんですけども。

ただそこで、神戸市役所の職員も多分僕と同じようなメンタリティーだと思うんですけども、まず、皆さん考えて欲しいんですけど、無秩序に公園を使う、これは散歩行っても良いんですけども、普通にぶらぶら過しますよね、無秩序。だけど、集团的に無秩序に、排他的、独占的にそこを使われるとやっぱり問題出て来ますよね。テキ屋がたこ焼きを売って良いのか？もちろん6時か8時くらいになったら帰っていく。ただ、公園を散策する憩いの空間にいる人に何か提供する、そして帰っていく。当然ひと舟300円か350円取って。それは何かというと、やっぱり営業行為、つまりその場所を使って事業してるんですね。事業をしているのは、我々非常にまずいというふうに当然思うんですよ。

だけど、例えば、さらにその個人ではなく、もっと広がりのある方がその空間で楽しむっていうことが出来る仕組みが出来れば、行政としては丸になって来るのかなと。では、その線引きをどこでするのかを問われると、非常に難しい回答になる。

ただ、東遊園地の取り組みを見ていると、ここにおられる99%の方がそれは丸やと思います。そして、そこが、どういうルール、どういう仕組みならば良いのかというのを作らんとあかんんですけど、都市公園法を読んでも書いてないんです。ここからは僕の市役所職員ではなく一個人の私論ですけども、一定以上の規模の、または一定以上の数の方がそこを活用していく上で、市は穴ぼこが出来たり照明柱潰れたら直すという最低限ベーシックなハードの整備はしますが、その上を、上下分離でないけども、何かある母体、最終権限者と協定を結んだ上で、その人らがコンセンサスを持ったローカルルールを作って、その中で一定の秩序を持ちながら楽しい活動をすることが達成できれば、これは正解だと思います。

となると、それは条例かルールか規則か判りませんが、それを模索していく。先ほど全体最適とありましたが、1個1個の公園でしたら個別最適というのも模索しないといけないかなと。千里南公園は周りに住宅も在りますが、適当な広さもあり多少の音でそんなに苦情来ないんですが、小さい遊園ですとしたりそこは個別最適で、そこでは違うルールを作らんとあかんと思うんです。そこをどうして行くかをうまく解いていくのが、まさにこれからの市民さんの知恵の出どころでもあるし、我々行政の知恵の出どころかなと思います。

岡:

今回のテーマは「これからの都市公園の経営と利活用」で、今回の法律の改正は、都市全体の経営のなかで公園という空き地をどうやって活用して行くかということになっていると思うんですが、お話を聞いていくと、経営というよりも、実際に公園で活動されている、例えば村上さんはこの公園を他の公園より良くするなんて全く思っておられないだろうな、どちらかと言うと、そのまちの中で、まちが良くなるような、そのまちの公園を創るというふうな感覚でいらっしゃるんじゃないかなと思うんですけども、そういうことが出来るのは、個人判断と言ったらおかしいんですけども、毎回毎日色んなことをジャッジされている、先ほどの話も含めて。そういうことが出来る人、あるいは団体というのは、広がりを持つことが出来るのでしょうか。ちょっと難しいことで申し訳ないですけども。

村上:

見たわけではないので希望的な観測になりますけど、企業だろうが、市民だろうが、まちのために何かしようと思ったり、口に出したり、実際に行動する人というのは明らかに増えていると思っています。パブリックな事柄に、行政だけではなくて、市民や企業を含めた色んなセクターが関わらなければいけないことも、また増えていると思います。行政と違って、市民や民間セクターの得意なのは、計画をそれほど重視せずに進められる、実践主義というか実験主義というか、そういうスピーディーなトライアルというのは得意にするところですので、行政が持っているチェック機能と合わせれば、かなり強い力になると思います。私は日本人の良い特性は先進知見、これは良いと思ったら皆どんどん取り入れていくのは良いところだと思いますので、いくつかの事例が色んな方に見えてきたら、市民が公園を良くして行こう、自分たちも関わって行こうと思うのは多分ある程度までは浸透すると思います。東遊園地で活動している時も、市内の色んな所からいらっやいますけども、中には電車乗り継いでしか来れない方もいるわけで、その方々がいつまでも東遊園地だけが良いねというのではなくて、こういうふうに出来るんだということを、実体験を元に確信を持って、地元の小さな公園でもやってくれたら、それが一番良いなと思います。

岡:

小野さんは、公園のマネジメントする人たちに何を期待しますか。

小野:

マネジメントは経営とよく訳されます。ただ、経営というと利益を上げるとか、企業の目的となるものが、収益を上げるという所に、株式会社の発想がどうしても浮かぶので、そうではなくて、それを活用して、目標、もっというビジョンですね、どんな社会にしたいのか、どんな自分の住んでるまちにしたいのか、というビジョンを示して良いんだよっていうことを公園サイドが言ってあげる、そういうのをすくい取ることができる。良い公園のまちはやっぱり良いまちです。さっき村上さんがおっしゃっていたように、どうですかね、国際競争力もある意味有ると言えると思うんですね。

今、公共心が日本人がどうなんだと言われていますが、声の大きい人ばかりがどうだという話も無くはないんですが、今日、苦情の話も有ったじゃないですか、とても言い易いんですよ、苦情は。憂さ晴らし、そういう言い方良くないですけども、色んな意味で、気が付いたことはどんどん言って下さい。でも、それって、みんなで考えようじゃないかと、うまく切り替えていく方法を、例えばニューヨークの苦情の受付の電話があるんですけど、公園サイドが逆手に取って、それに対応できる、何をしているのかというパトロールを公園のOBとかを使ってやっているんですね。公園でそういう対話を始めるということで、良いまちをつくらうということに皆さん参加しませんかという、行政的な、政治的な、色んな意味での市民を作っていく仕組みの一部になっているのかなと。そういうことを意識して頂いたら、もっと面白くなるんじゃないかなと思います。

岡:

私は従来から機嫌よく暮らすという言葉をいつも使っていて、皆が機嫌よく暮らせるまちがとても良いと思っています。その中にあるのが、例えば人の居場所が在るとか、それから自分のやりたいことが出来るとか、そこで人と出会うとか、それから、人が主体的に関われるとか、この4つくらいのことでこの幸せな暮らしが実現するのではないかと考えているんですが、まさに今日のお話は、そういう場の入り口として、中々大きなまちづくり、それも私はまちづくりと言わずに、まちづくりの時代はもう終わって、まちを育てる時代で、まち育てだと思っているんですけども、そういうことを市民が始める第一歩として、公園という場所がその役割を果たすような、そんな可能性を感じている、そういうことを今日感じました。

3人の方々、本当に今日はありがとうございました。